

写真日記を作成することによる空間図式探究

Investigation into Spatial Schema by Constructing Photo Diaries

藤井 晴行[†], 篠崎 健一[‡]
Haruyuki Fujii, Ken-ichi Shinozaki

[†]東京工業大学, [‡]日本大学
Tokyo Institute of Technology, Nihon University
fujii.h.aa@m.titech.ac.jp

Abstract

This article proposes a method of exploring an actual field to find or invent the spatial schema through which we are understanding or constructing the relationships between us and our environment. The method employs Photo Diary as a core recording medium. Photo Diary is composed of a photograph, or a set of photographs, sometimes, and a set of verbal descriptions of the fact seen in the picture, the experience of the researcher taking the picture at the field, and the interpretation of the fact, the experience, and the something between them.

This article focuses on the findings related to the method that we are becoming aware of through a series of on-going inquiries into the spatial schema concealed behind the spatial organizations of traditional houses in Ryukyu region.

Keywords — Methodology, Photo Diary, Spatial Schema, On Site Study, Ryukyu

1. はじめに

私たちは写真日記という媒体を用いて環境との関係の理解を方向づける空間図式を探究している。この探究方法は固定した様式をもつものではなく、実践を通して構成され続ける探究方法である。ものごとの探究を通してものごとの探究方法の実践と探究を同時に行なっている。具体的には、私たちが建築という活動における広義のデザイン行為に注目していることから、都市や建築などの人工物によって構築された環境の経験を写真日記という媒体を用いて表現することを通して空間図式を探究する方法を構築しながら、都市や建築の空間経験の関わる空間図式を明らかにしようとしている。既報[1][2]では空間図式とその構成過程の概要を報告している。本報では、人工物の創生や使用における人と人工物の関わり方を探究する認知科学の方法のひとつとして、写真日記とその構造化を用いて空間図式を探究する構成的方法の意義とその実践における気づきについて議論する。この探究方法そのものも、探究の対象であり、構築の途上にある。むしろ、実践を通して構成しているので、固定した形式を持つことはないかもしれない。ここで報告するものごとはある程度安定した形式の構成に向けての現在の状況である。

2. 空間図式と認知科学

空間図式 (spatial schema) はものごとの空間的な関係の知覚や認識を方向づける心的な構造である。空間という概念と図式という概念を合成した概念である。私たちは自分が居る場所をそこにあるさまざまな対象との空間的な関係によって知覚し、自分を定位し、自分と環境との間に動的な均衡をつくる[3]。空間図式は空間の実体的構成と空間の身体的経験を結びつけ、からだが知っているものごとに空間に関する概念を接地する媒体となると仮定している。空間を物質的実体として客観的に扱うことと主観的・恣意的に意味づけされた存在として扱うことを空間図式によって橋渡しすることを目論んでいる。空間図式は環境の認識や創出に関わる認知プロセスをモデル表現するための措定物である。空間図式を探究することは、認知プロセスをある側面から理解することに貢献するばかりでなく、人間と環境の空間的な関係を有目的に創出するデザインという行為の研究に寄与する概念体系の構築に貢献できると考えている。

空間図式の探究には構成的方法が適している。構成的方法は、ものごとの生成、生成されたものごとと人間と環境の間のインタラクション、インタラクションの分析、分析結果を踏まえた継続する行為の焦点化を循環して知や人工物を構成する方法である。空間図式は人間と環境のインタラクションを方向づけるとともに人間と環境のインタラクションによって変容するからである。空間は環境と心身とのインタラクションを通して認識される。環境と自分の身体からなる実体レベルの構造は、空間図式を通して、空間的な関係として理解される。空間図式は実体レベルでのインタラクションにおける知覚、感覚、運動などの経験に基づいて形成、維持、更新される。空間図式は、実際の場所を創出したり、場所や場所に潜む空間図式の記号表現(ことば、図、スケッチなど)を作成したりすることによって、顕在化される。また、実際の場所を経験したり、場所や空間図式の記号表現を理解したりするときに、それらを方向づける。

3. 記録媒体としての写真日記

私たちは写真日記を用いて空間図式を探究している。ある場所を経験し、その場所の「写真日記」を作成し、写真日記を構造化することを構成的に繰り返すことによって、空間図式を顕在化するという方法を考え、実践している[1][5][6][7]。空間図式の探究に、都市や建築における自分たちの実体験に直接的に結びつく空間図式を写真日記として表現し、写真日記を KJ 法によって構造化することを通して空間の経験に潜在している空間図式も浮き彫りにするという方法を用いている。

写真日記作成の基本は、ものごとを経験したり、何かに気づいたりしたときに、それらに意識を向け、それらの内容と関わりをもつ実体を意識的に写真撮影し、かつ、言語表現することである。写真日記を構造化する際の省察において、自覚されずに撮影された情報に、偶然、気づくことがさらなる発見や発想の契機となる場合がある。

写真日記 (photo diary) は実際のものごとを経験して収集する情報を写真とことばによって記録する媒体である[8][9]。写真と三種類の記述 (事実記述, 解釈記述, 経験記述) からなる。写真はものごとの実体的な構造を映す。ことばでは記述できない情報を視覚的に記録したり、自覚していない情報を自覚している情報と一緒に記録したりする。ことばによる三種類の記述は、経験している場所に関する事実、事実と経験とを関連づける経験者の解釈、経験しているものごとを表わす。撮影されたものごとはこれらの記述のモデルとなる (注; モデル理論的意味論のモデルという意味)。

写真日記は写真とことばによる記述からなる。撮影者、撮影日時、撮影場所などの情報 (日記情報) が写真とことばによる記述を補完する。

写真は視覚的な情報を記録する。撮影時に調査者が、少なくとも撮影対象を、可能であれば撮影範囲、構図も、意識的に決定することを前提としている。いかなるものごとをいかように記録しようとしているのかを自覚していることが肝要である。撮影記録されるものごとの選択は調査の一人称視点と不可分である。調査者は自分が経験している全体論的な (holistic) なものごとをいかなる断片 (segment) として記録するかを一人称視点で決定する。撮影記録されたものごとは、一般的に、視覚的に客観化されたものごととして扱うことができる。また、写真には撮影意図にもとづくものごとだけではなく、それに関係した全体像が割りこんでくるので、写真を撮影意図とは無関係に多様に解読することが可能になる[4]。すなわち、研究対象を特

定するにしても、研究対象に限定されないものごとの断片の記録となる。

ことばによる記述は、基本的には、撮影意図にまつわるものごとの文章表現である。撮影されている事実を記述する文章 (事実記述), 撮影されている事実から解読できるものごとや撮影時の経験と撮影されている事実とを関連づける法則的なものごとを記述する文章 (解釈記述), 撮影や撮影の省察において感じたり気づいたり考えたりしたものごとなど撮影にまつわる調査者自身の経験を記述する文章 (経験記述) の三種類の記述と、これらの記述を総合する文 (表札) からなる。事実記述は客観的な記述であることが要請され、経験記述は主観的な記述であることが許容される。解釈記述は客観的なものごとと主観的なものごとの境界領域にあり、これらをつなぐ役割も担う。

写真日記をフィールドワークの記録メディアとするこの意義は、見ようとしたものごとを明確かつ具象的に記録し、見ようとしたものごととともに全体を構成しているが見よう意識していなかったものごととも具象的に記録しておくことにある。前者の役割はことばによる記述と写真が担い、後者の役割は写真が担う。ことばやスケッチや測定装置を用いる記録においては、言語表現や描画や測定値に記号化される過程で、現前のものごとが記録したいものごととして抽象化されるのに対して、写真には調査者が見ようとしたものごとと見ることを意識していなかった現実とが客観化された存在として共存している[4]からである。構成的な研究の過程で新たな変数に気づき、見ようとするものごとが変容する場合に、写真日記を撮影された事実と接地させて再解釈および再構成することが可能である。

写真日記は全体論的なものごとを断片の集合によって記録する媒体である。時間的および空間的な広がりを持つものごとの全体をありのままに記録・伝達する媒体ではない。ことばによる記述には記述対象の選択と先に触れた抽象化が伴う。写真は撮影範囲と構図に依存して視覚的情報をサンプリングする。その情報が明らかに事実であるのは、厳密に言えば、時空上の写真を撮影する (サンプリングを行う) 位置に限られる。

4. 探究方法

空間図式とその探究方法を構成的に探究することを意図し、写真日記を用いる一連の探究を沖縄県伊是名村島伊是名地区の後辺 (くしひん) をフィールドとして行っている。探究の流れは、臨地調査ワークショップ (I), 過程 I で作成した写真日記の記述の増補と

表札の更新(Ⅱ)、個々の調査者が作成した写真日記の統合と統合した写真日記の構造化(Ⅲ)、構造化の結果に基づく写真日記の調整と補完(Ⅳ)の構造的な繰り返しである。臨地調査ワークショップ(Ⅰ)や文献調査などによって新しい知見を得るごとに写真日記を新作または増補し、写真日記全体の構造を更新する。以下にプロセスⅠ～Ⅳの要点を示す。

Ⅰ. 臨地調査ワークショップ

フィールドおよびフィールド近傍において、①写真撮影、②写真日記(速報版)の作成、③写真日記(速報版)の即興的構造化、④気づきの物語発表、⑤省察を数クール繰り返す。各項目の間を空けすぎず1クールを完結することが好ましい。1クールの基本的な流れと標準的な所要時間は下記の通りである。調査状況に応じて①②①②③④というような流れにしてもよい。

① 臨地調査と写真撮影：2時間 30分程度

テーマを設定し、テーマに関連する写真を撮影する。テーマは抽象的なものごと(例:「琉球の風を感じる」,「気になるものごとを意識する」)でも調査目的に関連する具体的なものごと(例:「具現化された原初的空間図式を見つける」)でもよい。これまでの経験を踏まえると、撮影する写真の枚数は各調査者20~30枚程度が好ましい。テーマに関連する10例程度のものごとは既存の事例の模倣や思いつきによって比較的容易に見つけることができる。それ以上のものごとを見つけるには多少の集中力を要する。このような適度の負荷が既存の観方にとらわれない観察を促進する。写真を撮りすぎると写真日記(速報版)の作成とその即興的構造化を限られた時間で行うことの負荷が高くなる。写真に撮影できない身体感覚や視覚以外の環境情報、写真を撮ろうという気持ちになったとき気づきや驚きや感動などの経験、注目している撮影対象などをメモしておくことで写真日記作成の助けになる。

② 写真日記の作成：2時間程度

写真撮影後、同日中に、撮影した全写真の一枚ごとに写真日記を作成する。この時、表札、事実記述、解釈記述、現象記述をそれぞれ十全に書かなくても、それぞれの写真について、撮影しようとした事実やその事実に関連すると撮影者が考える空間図式を記してあればよしとする。撮影時の記憶が新しいうちに全写真とインタラクションする状況をつくるためである。

撮影した写真の全てに事実記述、解釈記述、経験記述、表札をつけ、写真日記とする。ここでは、調査者が最も大切にしたい内容を、それぞれの記述につき、1~2文の簡潔な文章で表現すれば十分である。後続の即興的構造化に備えて、撮影した写真を全て写真日

記にすることを限られた時間内に完了することが肝要である。各記述の増強や精緻化を行う機会を臨地ワークショップの後に設ける。

③ 即興的構造化：2時間程度

調査者が各自の写真日記をKJ法の要領で構造化する。写真撮影されたものごとやことばによって表現されたものごとに注目し、直観や推論によって互いの間に関係性を見いだせる写真日記をグルーピングする。複数の写真日記を組み合わせることによって浮き彫りになる関係性もある。個々の写真日記やグループの関係性に基づいてボトム・アップでグルーピングすることが肝要である。一つの写真日記を包含関係にない複数のグループの要素にしてもよい。予め定めた観点からトップ・ダウンで分類または整理しないように留意する。グループには属する写真日記を纏める表札文を、グルーピングの際に意識した関係性を踏まえて記す。グループと写真日記のグルーピングやグループとグループのグルーピングを写真日記全体が一つのグループになるまで繰り返す。グルーピングによってつくられる構造に対する正解または不正解の判断はない。

限られた時間内でグルーピングを完了することが困難であると予測される場合、最小単位のグループ(写真日記のみのグループ)を作成し、グループ間の関係性を踏まえ、最小単位のグループの順序を決めるだけでも構わない。グループの順序は後続の物語発表に不可欠である。順序を決めるということも構造化の一種である。

④ 気づきの物語発表：一人につき10分程度

調査者の一人一人が写真日記の全写真を用いてスライドショーを行なう。聴視者は同じフィールドを同じテーマで調査をしている自分以外の調査者たちである。一連の写真を用い、自分が如何なることに気づき如何なることを思ったのかを10分程度で語る。写真を提示する順序は構造化の結果と物語の構成に基づく。一枚一枚の写真の断片的な説明の繰り返しにならないように留意する。

個々の調査者が作成した写真日記の写真のスライドショーを行い、フィールドワークに参加したメンバーに自分が撮影したものごとや見つけた空間図式を披露する。写真日記は全て用いる。撮影順に写真を提示し、それぞれの写真日記について断片的に説明するのではなく、全編に調査者なりのストーリーを持たせるようにする。

このステップでは二種類のインタラクションが生じる。発表者は自分の一連の写真日記とインタラクションすることによって自分の経験を反芻する。視聴者は

発表者や発表者の写真日記とインタラクションすることによって発表者の経験を疑似体験し、発表者の経験との共通性や差異を意識して自分の経験を反芻する。

⑤省察と懇談

調査全般、写真撮影 (①)、写真日記の作成 (②) と即興的構造化 (③)、物語発表 (④) を振り返り、懇談する。振り返りと懇談の内容を参考にして、次のクールのテーマや方法を調整してもよい。

II. 写真日記の記述の増補と表札の更新

臨地ワークショップにおいて蓄積した写真日記 (速報版) のそれぞれについて、速報版の作成時に割愛したものごとやその後気づいたものごとなどを各記述に加え、写真日記を増補する。即興的構造化において記したグループの表札に注目して写真を解説し、そこで気づいた内容を加えてもよい。必要に応じて表札も更新する。このプロセスは記憶が新しいうちに遂行することが好ましい。臨地調査ワークショップの実施中の空き時間を利用して少しずつ進めたりワークショップ終了から間を空けないうちに時間をつくって進めたりする。

III. 写真日記の統合と構造化

全調査者の全写真日記を一つにまとめ、KJ法の要領で構造化を行なう[2]。構造化の進め方の基本は即興的構造化と同じである。全ての写真日記が属し全ての下位グループが含まれる最上位のグループが完成し、写真日記全体が表現する物語の骨格ができあがるまで行なうという点が即興的構造化と異なる。構造化において大切なことは断片的なものごとを紡いで全体をつくるものごと気づくことである。予め定めた観点からの分類や整理では、先入観を超えた未知のものごと気づきにくなるという懸念がある。

IV. 写真日記の調整と補完

生成した構造の各グループの表札がそのグループに属する下位グループの表札の内容や写真日記の各種記述と表札の内容を包摂していることを確認し、構造の網羅性を検証する[2]。あるグループや写真日記の内容が捨象されている場合、その上位にあるグループの表札のいずれかが捨象している内容を拾遺するように表札または構造を調整する。

5. 探究方法における構成的プロセス

探究の各プロセス (I~IV) 及び探究プロセス全体の繰り返すには、構成的方法における焦点化、生成、インタラクション、分析のプロセスが、さまざまな周期で、関わる。

気になるものごと気づく構成的プロセス

ある場所を経験することはインタラクションに、現前の撮影対象を2次元の画像に収めることは分析に、これから撮影するものごとを思い描くことは焦点化に、思い描いたものごとを見つけることは生成に、それぞれ対応する。

写真を撮影する構成的プロセス

ある場所を経験し、その場所やそこにいる人々との間に何らかの関係が生まれることはインタラクションに、記録するものごとを見いだすことは分析に、撮影対象、撮影範囲、構図などを構想することは焦点化に、構想にもとづいてカメラを構えてシャッターを切ることは生成に、それぞれ対応する。

写真日記を作成する構成的プロセス

写真を読むことはインタラクションに、写真時に意識した事実、解釈、経験を想起したり新たな事実や解釈に気づいたりすることは分析に、これらのことばによる記述やそれらを総合する表札文を構想することは焦点化に、写真とことばによる記述を写真日記としてまとめることは生成に対応する。

写真日記を構造化する構成的プロセス

写真日記を一覧することはインタラクションに、一つのグループになる写真日記や写真日記グループを見つけることは分析に、それらを一つのグループにする根拠を思案することは焦点化に、写真日記や写真日記グループのグループをつくってグループに表札を付与することは生成に対応する。

6. 写真日記を用いた探究方法の探究

2017年3月28日から探究方法の探究も意識して実践している伊是名島 (沖縄県) の伝統的民家における空間図式の探究の概要と探究方法に関する気づきを継続的に記す。これまでに7つのセッション (Session-1~7) を行なって、空間図式の探究そのものは2013年春より継続して行なっている。

Session-1: 臨地調査ワークショップ (I-BC0)

実施概要

空間図式の探究方法の探究を意識した臨地調査ワークショップを実施する。①写真撮影、②写真日記 (速報版) の作成、③写真日記 (速報版) の即興的構造化、④気づきの物語発表、⑤省察を1クール行なう。実施期間は2017年3月28日 (①②③④⑤)、5月20日 (①②) ~ (③) ~6月8日 (④⑤) の2回である。それぞれの回の参加者は異なる。筆者らを含む延べ6名が参加した。筆者以外の参加者は写真日記を用いる探究

の初心者である。

臨地調査と写真撮影 (①) に関して、原初的な空間図式の現れであると自分が考える情景を 20 枚程度撮影するという設定をした。原初的な空間図式の代表例については事前に説明してある。撮影する情景に条件をつけるのは原初的な空間図式を意識的に捉える姿勢をとることを促すためである。20 枚以上とするのは基本的空間図式を既存の事例とは異なる事例に結びつけて新たに見つけようと意識して環境とインタラクションする状況をつくるためである。また、探究方法についての気づきに意識するようにも教示している。

気づき

臨地調査と写真撮影 (①) に関する設定は目論見通りに作用している。参加者 6 名の各人は一枚一枚の写真を見つめ、空間図式を見つめるという意識を持って撮影したと証言している。また、十数枚を越えた頃から新たな空間図式を見いだす写真撮影が難しくなると全ての参加者が証言している。この方法に慣れている参加者 (筆者ら) の写真撮影にはある事例の撮影するときに気づいたものごとがその後遭遇する事例にも通用するか否かを確認しようとする姿勢が見られる。写真撮影を続けている最中にそれまでに撮影したものごとと関係性に気づくことがある。その気づきはその後写真撮影の方向性に作用する。例えば、気づきを支持するものごとを探したり、否定するものごとを探したりする。その過程で気づきの確からしさが増減する。

「空間図式を顕在化するためのフィールド調査においては、撮影時に、撮影者の空間図式が影響し、それが撮影された写真、事実記述、解釈記述、経験記述に、陽に (自覚的に)、陰に (無自覚的に)、反映される。写真日記の構造化においては、陰に反映された空間図式が顕在化されることがあり、これが新たな空間図式の発見となる [9].」というプロセスが生まれている。一方、この方法の初心者 (筆者を除く 6 名) にはそのような傾向が見られず、既に提示してある原初的な空間図式にあてはまる事例の撮影が繰り返される。上記④のスライドショーにおける説明では、初心者には空間図式の現れと見る事実の指摘が漠然としていて直感的に理解しにくいという傾向が見られる。熟練者のスライドショーでは写真日記を構造化するストーリーの断片が語られることがある。また、ある情景の撮影を意図する自分の思考に関するメタな説明を挿入することがある。

全ての調査者に共通して、生活行為と空間構成の関係性への言及が希薄であると感じる。建物や集落の空間構成に空間図式の現れを見ようとする意識が強く働

き、生活行為との関係性への意識が希薄になるためではないかと考えている。

Session-2: 臨地調査ワークショップ (I-BC1)

実施概要

2017 年 6 月 19 日に①臨地調査・写真撮影、②写真日記 (速報版) の作成、③写真日記 (速報版) の即興的構造化、④気づきの物語発表、⑤省察を 1 クール行なう。生活行為と空間構成の関わり方を意識して調査することにする。前回 (BC0) において、生活行為と空間構成の関係性への言及が希薄であると感じたからである。参加者は 4 名である。このうち 3 名は臨地調査ワークショップ (I-BC1) の参加者 (筆者らを含む) である。1 名は新たに調査に参加した者であり、写真日記を用いる探究の初心者である。

気づき

探究方法に関する以下の気づきを得ている。

臨地調査・写真撮影 (①) に関する気づき

臨地調査を繰り返している馴染みの場所でも、写真撮影時の状況、例えば、天候、テーマ、調査者の知識や体調などの違いによって、見え方や観方が異なり、これまでに気づかなかったものごとに気づく。

見たいものごとはじっくり観察すると見えてくるというよりも、ある状況に遭遇すると反射的に見えてくると感じることもある。あるものごとを見たいという意識がそれを見つけようとするアンテナの感度を上げ、見つけるや否やそのものごとを撮影しようとする反射神経を鋭敏にする。

写真日記 (速報版) の作成 (②) に関する気づき

既に知っているものごとであっても撮影時に全てを意識するわけではない。撮影時に意識下に潜在していた既知のものごとが写真日記の作成時に意識に上ることがある。

同じ撮影対象であっても撮影範囲や構図によって解読される内容が異なる。主たる撮影対象と一緒に写るものごとが撮影対象に文脈を与えうる。例えば、人が入っている写真にはライブ感がある。撮影対象以外のことには無自覚な撮影をするのではなく、記録したり伝達したりしたいものごとを自覚して、撮影範囲や構図などを意識的に決定すべきである。

撮影範囲、構図が類似しており、ほぼ同じに見える写真であっても、見ているものごと (撮影対象) は、調査者によって異なったり、同一の調査者によるものでも撮影時によって異なったりする。写真日記の表札は見ているものごとの相違をわかりやすく表現することが肝要である。事実、解釈、経験の各記述には調査者が見いだした意味や大切にしているものごとを示し、

記述内容を反映するように表札をつくると良い。

「きれい」とか「よい」とか感じるだけで撮影してしまうことがある。そのような写真でも写真日記の作成時に撮影されているものごとの意味を考えることを意図して解読することで、「きれい」とか「よい」とは異なるものごとが見えてくる。臨地調査・写真撮影と写真日記作成の連携はこのような経験をもたらす。

気づきの物語発表 (④) に関する気づき

他の調査者のスライドショーと物語を視聴することを通して自分が撮影した写真に自分が意識したものごととは異なる意味や内容を見いだすことができる。

ことばによる表現と写真が遊離していると感じることがある。写真日記の初心者に見れやすいという傾向がある。熟練者にも皆無であるというわけでない。

ひとつは、撮影対象として撮影範囲に収めることが可能であるにも関わらず撮影されていないものごとについての言及があるというタイプである。言及したいものごとを写真にきちんと収めるという意識によって改善できる。言及したいものごとが撮影されていないことに気づいた場合は、後続する調査においてそれを撮影し、写真日記を増補すればよい。

ひとつは、具体的なものごとについての言及をすることなく抽象的で難解なものごとと言及するというタイプである。そのような物語には実感が湧きにくい。例えば、生活行為に関する言及の仕方が観念的であり、調査した場所で実際になされている生活を想像できない。気の利いたことを言わなくてはならないという気負いが素直な観察を鈍らせたり、観念的・抽象的な説明を誘発したりするのではないかと思われる。自分が見ているものごとや考えているものごとを素直に表現することを繰り返したり、調査テーマに関する学びを重ねたりしているうちに、思いがけないものごと気づくことがあるので、気負う必要はない。

Session-3: 臨地調査ワークショップ (I-BC2)

実施概要

2017年6月20日午前に①写真撮影, ②写真日記(速報版)の作成を1クール行なう。生活行為と空間構成の具体的な関わり方を意識して調査することにする。前回(BC1)において、生活行為と空間構成の関わり方について観念的・抽象的な言及が少なからずあり、臨地調査にしては臨場感が弱いと感じたからである。参加者はBC1と同じ4名である。

気づき

臨地調査・写真撮影 (①) に関する気づき

あるものごとを美しいと感じる経験は写真撮影のきっかけになり、美しいと感じているものごとが撮影対

象になる。このような場合、撮影対象の美しさを写真日記で語れるように意識して撮影することが肝要である。美しさに関する記述が漠然としている写真日記であっても、意識されずに撮影されているものごと気づいたり、構造化の際に再解釈したりすることによって、調査者がまだ気づいていない意味を見つけられることがある。ただし、記述をしにくいからと写真日記から捨象することは禁じ手としなくてはならない。

人が居ない空間であっても、空間を構成する建築要素、建築設備、物品の配置や状態を住意識や生活行為の現れとして見るのが肝要である。空間構成に住意識や生活行為を重ねて見られるようになるには臨地調査や日常生活を繰り返しての観方の涵養が必要である。

テーマが漠然としている場合、何を見つければ良いのかわからない、テーマが限定的な場合、どうやって見つけられれば良いのかわからないという初心者の声がある。いずれも場合も、臨地調査で気になるものごととテーマとの間に関係がなさそうに見えても、両者の関係性を既存の枠組みに制約されずに柔軟に見つけようとする姿勢が肝要である。たまには、気になるものごとを、テーマにとらわれず、気楽に撮影してみるとよい。枠組みの境界を越えた気づきのきっかけになるものごとを見つけることができるかもしれない。

ある民家において庭の特定の場所の使われ方に関してあることに気づき、他の民家で同様の場所がどのように使われているかを調べるといように調査を方向づけている。

写真日記(速報版)の作成(②)に関する気づき

その時ははっきり理由や意味をわからなくても、何か重要だと感じたなら、その感覚に真摯に従って丁寧に撮影してみるとよいかもしれない。写真に映る事実や蓄積した経験が、その感覚にかたちをあたえ補強してくれることがある。

意識して構図を定めることは大切である。水平垂直や明暗の対比などの写り方、画面の隅々に写るものごとなどに気を遣って丁寧に撮影された写真は丁寧に解読される傾向がある。写真日記を用いた探究に影響する。KJ法が有効に機能するかのポイントである。

Session-4: 臨地調査ワークショップ (I-BC3)

実施概要

2017年6月20日午後に①写真撮影, ②写真日記(速報版)の作成, ③写真日記(速報版)の即興的構造化, ④気づきの物語発表, ⑤省察を1クール行なう。前回(BC2)に引き続き、生活行為と空間構成の具体的な関わり方を意識して調査することにする。構造化と物語発表にはBC2とBC3において作成した写真日記を

用いる。参加者はBC1と同じ4名である。

気づき

臨地調査・写真撮影 (①) に関する気づき

他の調査者の動向に注意を払うとよい。他者の撮影状況から自分が気づいていないものごとの存在に気づくことがある。

撮影時の気づきを大切に、追っていくことで、新たな発見がある。

写真日記 (速報版) の作成 (②) に関する気づき

個々の写真を撮影している時には気づかない写真間や写真日記間の関係性が写真日記作成時に見えてくる。

同じ位置から同じようなアングルで撮影したとしても、異なる写真日記や表札となることがある。

一通り写真撮影を終えて臨地調査拠点に戻り、大切にしたい情報 (表題) を付記した写真を印刷し、全体を鳥瞰してから、臨地調査・写真撮影を継続するという方法はより深い洞察を可能にするかもしれない。

気づきの物語発表 (④) に関する気づき

ことばによる表現と写真が遊離していると感じることが依然としてある。初心者の一人は遊離の指摘に対して何を見つけようとして良いのかわからないと語っている。写真撮影から構造化までの意識の持ちようだけでは解決できないものごとがありそうである。

Session-5: 臨地調査ワークショップ (I-BC4)

実施概要

2017年6月21日に①写真撮影、②写真日記 (速報版) の作成、③写真日記 (速報版) の即興的構造化、を1クール行なう。民家や集落に関して気になるものごとを写真日記にすることに。前回 (BC3) の省察と懇談 (⑤) において、設定されたテーマに関して何を見つければ良いのかわからないという感想があったからである。このクールの臨地調査・写真撮影 (①) の序盤で、写真撮影の直後に各自が何を見つけたかを披露し合い、臨地調査に関する不安を減少させることに。参加者はBC1と同じ4名である。

気づき

臨地調査・写真撮影 (①) に関する気づき

生活空間を調査する場合、空間や物品の位置関係から居住者の生活行為と行為をなす領域の関係性を想像しながら撮影するとよい。

居住者の話を聞くことで、空間の理解が深まる場合がある。

写真日記 (速報版) の作成 (②) に関する気づき

あるものごとを記録する価値があると感ずいても、価値があると感ずる理由を思い描けないままに撮影し、事実記述はできても、解釈記述と経験記述に四苦八苦

するという証言がある。このように理由を意識できずに撮影する写真でも、ある特定のものを撮影しようとしているという意識をメタ認知し、そのものごとが最も明確に表れるように撮影対象、撮影範囲、構図を定めることが大切である。これらも写真解読のヒントになりうる。

気づきの物語発表 (④) に関する気づき

他の調査者が作成した写真日記をよく理解することはとても重要である。

Session-6: 写真日記の記述の増補と表札の更新 (II) 実施概要

臨地調査ワークショップで作成した写真日記速報版の表札、事実記述、解釈記述、現象記述を、個々の調査者が臨地での記憶が薄れないうちに増補し、適切な表札をつける。2017年6月29日にBC1~BC4に参加した4名の写真日記の増補・更新が完了している。

気づき

撮影時からある程度の間をとって写真日記を作成すると撮影時や撮影直後には気になりながらもことばにできなかった潜在的な認識が顕現する。写真日記の再考時にそれまでに意識していたこととは全く異なるものごと気づくこともある。写真撮影時や最初の写真日記作成時から気になっているものごとを表現しないという違和感が気づきを導いているように感じる。

写真を解読しているときに撮影時に意識していたものごとと写真日記作成時に気づいたものごととの関係性に気づく。その関係性を意識して写真の観方が方向づけられ、解読が深まる。この過程を経て事実記述が詳細になる。

撮影時に意識したものごとを再解釈したり撮影時の解釈を解釈するというメタレベルの解釈をしたりする。経験記述に関しても同様の記述レベルの昇華がある。

空間図式を見つけるとはどういうことなのだろうと考える。空間図式が空間の経験を方向づける心的構造であるとする、ある場所における調査者の空間の経験とその場所の空間実体的な構成は調査者の空間図式によって繋がる。そのような空間図式に臨地で気づいたとしたらそれは経験であり、写真の解読時に気づいたとしたらそれは解釈である。

写真日記 (の作成) には、調査テーマに関する実体的な事実、その解釈、それにまつわる経験に加えて、調査者によるものごとの理解の仕方やその基盤となるものごとが反映される。落ち着いて写真日記を作成する段階で、これまでに蓄積した知や経験が意識しているものごとになる。

写真を詳細に観察すると撮影時には意識していない

ものごとに気づき、撮影時に意識していたものごとと
 解読時に気づいたものごとから撮影時には見つけてい
 なかった意味を解読時に見いだせることがある。

臨地調査ワークショップのときには個別のものごと
 と認識していたものごとと共通する特徴やメタレベル
 の関係性に気づく。例えば、琉球の民家における東西
 の関係（正面から見た右左）、後前の関係（正面から見
 た奥と手前）、建物の上下関係はいずれも信仰や慣習に
 おける尊卑の関係に対応することを想起し、三種類の
 異なる関係が尊卑という共通する特徴によって関係づ
 けられることに気づいている。

自分が設定する撮影範囲や構図の合理性に確信を持
 つことができる。これらを設定することは、如何なる
 ものごとを写真に収め、如何なるものごとを割愛する
 かを決めるということである。見つけたいものごとを
 意識して写真の撮影と解読を行なうことを通して、撮
 影対象とその意味を、構成的に、考えることになる。
 このことを通して、見つけたいものごとや撮影対象に
 適した撮影範囲や構図を設定できるようになる。

撮影時にあるものごとに気づくという経験を調査者
 自身が認識していれば経験自体は経験記述の対象にな
 る。そのときに気づいているものごとは撮影可能な事
 実であれば事実記述の対象になり、事実から導き出され
 たものごととであれば解釈記述の対象になる。

写真撮影時の記したメモの大半は事実記述に相当す
 る。解釈や経験も同時に念頭にある。撮影時には、実
 体的なものごと、そこに見いだす空間図式やその他の
 ものごと、その周縁のものごとを意識する。臨地調査
 に慣れてくると事実を解釈や経験に結びけるインデッ
 クスとして見るようになるのかもしれない。

写真撮影時に記したメモに、気流、寒暖、音など、
 視覚ではとらえられない身体感覚に関わるものごとが
 記録されることがある。写真撮影時のメモが大切であ
 ることを認識する。

写真日記の記述の増補と表札の更新の終盤で、伝統
 的な民家の様式は風土における自己了解が固定したも
 のであるという旨の和辻哲郎[13]のことばを思い出す。

Session-7: 写真日記の統合と構造化（Ⅲ）

実施概要

調査参加者全員の写真日記を用いて写真 KJ法を行
 い、全ての写真日記を構造化する。

臨地調査ワークショップに参加した調査者のうち筆
 者らを含む3名が一同に会し、各人が作成した写真日
 記の統合と構造化を行なう。2017年6月30日に最小
 単位のグルーピングを完了する。筆者2名が最小単位

グループの表札に注目して個々に第二段階のグルーピ
 ングを行なう。7月6日に対面で各自のグルーピング
 を統合する。全く同じグループはそのままとする。そ
 れ以外のグループについては両立しない複数のグルー
 プに属する写真日記に注目し、説得性の高いグルー
 プを採用するか、解体してグルーピングをしない。第
 三段階のグルーピングも同様に行なっている。

気づき

構造化段階でも写真日記に記述するとよいと思うも
 のごとに気づくことがある。

写真に撮影されている視覚的情報に注目してグルー
 ピングをする傾向が強い。視覚的情報に現れやすい図
 式に共通する特徴を見つけようとする。構図が似てい
 ること、撮影対象の特徴が共通する、類似する、対比
 関係にあることなどをグルーピングの手がかりとして
 いる。写真日記を基礎資料とする KJ法において想定
 していることではあるが、視覚情報の力を改めて認識
 する。

調査テーマである空間図式や生活行為と空間の関係
 に着目しやすく、テーマや調査対象に関わる経験や知
 の蓄積が影響する。そうであっても、撮影時の意識の
 対象とは異なるものごとに重要性を見出す場合がある。

ひとつの写真日記に複数の内容が含まれる場合、構
 造化の観点が多重になる。写真日記が大切にしたいも
 のごとを丁寧に書き、内容を捨象しないように構造化
 することが肝要である。

第二段階のグループをグルーピングする過程で、研
 究関心が創発する。

現在、作成・構造化しつつある写真日記は、琉球民
 家の空間構成の探究開始当時（2014年秋：伊是名村で
 の経験が浅い）に構造化した写真日記に比べて、内容
 が表層的ではなくなり、深まり、現地の生活やものご
 とのあり方を反映してきていると感じる。

Session-8: 写真日記の調整と補完（Ⅳ）

写真日記の統合と構造化（Session-7）と並行して少
 しだけ実施されつつある。しかし、このセッションに
 まつわる気づきはまだ得ていない。

7. 中締め

写真日記を用いるこの方法は自分自身を観測する一
 人称研究の方法のひとつであると考えている。また、
 人工物が構築する人間と環境の関係を探究する方法の
 ひとつであるとも考えている。この方法で得られた気
 づきの学術的な「確からしさ」は、それらに基づいて
 行う主張がいかに事実に基づいているかに関わる。事

実記述（論拠）との結びつき（実証性）が弱い主張はそれが実は価値のある主張であるとしても独り善がりな観念的主張と解釈される。事実記述と主張の論理的整合性はあることは好ましいが、主張を事実記述から演繹的に証明しようとする、証明に関わらないものごとが捨象される懸念がある。フィールドに出た認知科学の方法としての基盤を構築するためには「主張の実証性をいかにして担保するか」という問いに的確に答える必要があると感じている。

参考文献

- [1] 篠崎健一, 藤井晴行, 片岡菜苗子, 加藤絵里, 福田隼登, (2015) “空間図式の身体的原型の实地における空間体験に基づく研究写真日記を基礎資料とする KJ 法の試み”, 認知科学, 第22巻, 第1号, pp.37-52.
- [2] 藤井晴行, 篠崎健一, (2016) “写真日記を調査資料とする空間図式の構成”, 2016年度日本認知科学会第33回大会, OS09-7, 8p.
- [3] Norberg-Schulz, C., (1971) “Experience, Space and Architecture”, Studio Vista Limitea.
- [4] 石毛直道, ケネス・ラドル, (1989) “イチバは文化をうつす魔法の鏡”, 季刊民俗学, No. 48, pp. 6-19.
- [5] 福田隼登, 藤井晴行, (2015) “身体性に注目した空間体験の図式表現方法に関する研究”, 日本建築学会計画系論文集, Vol.80, No.709, pp.559-567.
- [6] 福田隼登, 藤井晴行, (2016) “空間体験に基づいた心地よいシークエンスの身体的な図式の表現方法に関する研究”, 日本建築学会計画系論文集, Vol.81, No.724, pp.1281-1290.
- [7] 福田隼登, 藤井晴行, (2017) “空間体験から身体的な図式を抽出する方法の探究”, 日本建築学会計画系論文集, Vol.82, No.734, pp.1135-1145.
- [8] 藤井晴行, (2015) “知をデザインする”, 一人称研究のすすめ, 知能研究の新しい潮流 (諏訪正樹, 堀浩一編著), 近代科学社, pp. 151-170.
- [9] 諏訪正樹, 藤井晴行, (2015) “知のデザイン 自分ごととして考えよう”, 近代科学社.
- [10] Johnson, M., (1987) “The Body in the Mind The Body Basis of Meaning, Imagination, and Reason”, The University of Chicago Press.
- [11] Lakoff, G., (1987) “Women, Fire, and Dangerous Things”, The University of Chicago Press.
- [12] Lakoff, G., (1988) “Cognitive Semantics”, Meaning and Mental Representation (Umberto Eco, ed.), Bloomington: Indiana University Press.
- [13] 和辻哲郎, (1931) “風土”, 岩波書店.